

Title	トーマス・マンのゲーテ観：「ヴァイマルのロツテ」を中心として
Sub Title	Thomas Mann on Goethe Lotte in Weimar
Author	小名木, 榮三郎(Onagi, Eizaburo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1955
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.5, (1955. 11) ,p.93- 105
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00050001-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

トーマス・マンのゲーテ観

——「ヴァイマルのロツテ」を中心として——

小名木 榮三郎

現代ドイツ文學の巨星トーマス・マン (Thomas Mann 1875—1955) に就いて考える時、如何なる面からもゲーテという巨大な山を背景として見ない譯にはいかなない。このことは一人トーマス・マンにのみ限つたことではないが、マンの場合は、作品の下に流れ、全作品を貫くグルントイデーに於て、又作家としての成長過程に於て、ゲーテと特に深い關係にあるものといふことが出来る。マンの生涯自體がゲーテへの道を歩んだものと言つても過言でないであらう。マン自身も、シュティフター (Adalbert Stifter 1805—1868) の言葉をそのまま引用して、

「私はゲーテの様な人間ではないが、兎に角いささかはゲーテ家の末席に籍を置いている者だ。」

と述べている。

マンは若い時から晩年に至る迄、しばしばゲーテに就いて書いて書いている。

「ゲーテとトルストイ」(一九二二)、「ゲーテの親和力に」(一九二五)、「市民時代の代表者としてのゲーテ」(一九三二)、「著作家としてのゲーテの閱歴」(一九三三)、「ゲーテのファウストに就いて」(一九三九)、「ゲーテのヴェルテル」(一九四一)、「ゲーテ幻想」(一九四八)、「ゲーテとデモクラシー」(一九四九)、「ゲーテ二百年祭の挨拶」(一九四九)。

その殆んどは評論という形式に占められている。然しそこに盛り得る内容には、その性質上當然制約されるものがあつて、ゲーテに現われた天才的人間の偉大な像を立體的に表現するには、小説という形式を必要とする。この満たされざる要求に従つて書かれたの

が、長篇「ヴァイマルのロッテ」„Lotte in Weimar“である。それは六十七歳のゲーテを、過ぎし日の戀人シャルロッテ (Charlotte Kestner. geb. Buff 1753—1828) との再會のごう一八一六年の史實に基づいて描いてゐる。この作品はマンのアメリカ時代の初期一八九八年から三十九年にかけて、ファルケ (Conrad Falke) と共同して發行した「尺度と價值」(Maß und Wert) 誌に發表された。

× × ×

詩人ゲーテの名をドイツ文壇に華々しく登場させ、一躍ドイツのみならず、ヨーロッパにあまねくその名を轟かせた「若きヴェルテルの悩み」„Die Leiden des jungen Werthers“ (1774) は、ヴェッツラア (Weizlar) 高等法院に見習として來た二十三歳の青年ゲーテと、ケストナー (J. C. Kestner) という許婚者を持つ十九歳のシャルロッテ・ブッフとの不幸な戀愛體驗を基にして成立したことは周知の通りであるが、作中のヴェルテルとロッテの別れの場面は、現實の二人の關係に於ても實際にあつたものと想像される。

「またお目にかかりましょう。私達はどんな姿をしていますが、お互いに見分けがつくでしょう。私は喜んで行きます。然し永久にと言わなければならぬのでしたら、とても堪えきれません。」(「ヴェルテル」第一部の終り)

ヴェルテル即ちゲーテはこの様に言う程であるから、二人の交渉はその淺からぬ關係からして、この作品の外で何等かの結末を見るものと豫想されるが、記録によるとゲーテとロッテは、四十四年間というものの遂に再會することを得ないまま、各々の道を歩んだ。

一方は數々の女性を遍歴し、妻クリスティアーナにもこの年六月先立たれたが、傑作を積み重ねて詩聖と仰がれるに至り、一方は夫の豊かな愛情に恵まれて十一人の子供を生み、その九人を立派に育てはしたものの、四十七歳にして夫に死別し、淋しい寡婦生活をしていたのであつた。然しゲーテとロッテの再會は、一八一六年九月二十五日に實現した。ロッテはこの三日前から娘のクラアラ (Klara Kestner) を伴つて、妹夫妻を訪問すべくヴァイマルを訪れ、傍らゲーテとの再會に心を動かしたのであつた。ロッテは夫の死後、成長した二人の子供のことでゲーテに手紙を書き、後に二人の子供はゲルベルミュウレのヴァイレメル家でゲーテと會つたが、ゲーテはロッテのことを忘れたかの様に、傍を通つても、意識しか會おうとしなかつた。當時のロッテには、青春の日の貸借をゲーテとの再會

で融かしたいとの氣持があつたものと思われる。一方ゲーテは日と共にヴェツラアの戀人から離れ、極めて冷淡になつて殆んど無視していると言つてもよかつた。それは日記を見ても解ることで、この九月二十五日には僅かに一行で、

„Mittags Ridelis und Madame Keshner aus Hannover.“ (畫、リイデル氏夫妻、ハノーヴァーのケストナー夫人)

とのみある。尤も當時のゲーテには、妻クリスティアーネの死、全集の校閲、『西東詩集』原稿の整理、宰相の仕事の繁雜さなどがあつたのを見逃すことは出来ないが、それにしてもこの一行は、ロッテを数多いゲーテ訪問者の一人としてゐる。

果してこの再會は極めて冷たいものであつた。手掛りとなる資料としては、このゲーテの日記以外に三通の書簡が残され、この時の二人の消息を窺がわせている。

先ずロッテが彼女の息子アウグスト (August Keshner) に宛つたもので、内容の主旨は

「私は一人の老人と新に知り合ひになりましたが、もしこの人がゲーテだということを知らなかつたならば、また事實そうだと知つていても、私はその人から決して愉快な印象を受けませんでした。」

次にロッテと同行し、ゲーテ家の晝食會に出席した娘のクララが、兄アウグストに送つた書簡を見ると、

「彼の心には何んの感動も現われず、母に對し昨日も會つた様な態度で彼は話しかけた。彼の話は皆ありきたりのもの、上べだけのもので、心の奥底から出たものは何もない。母に對する態度は侍従の如く、儀禮的なものでしかなかつた。誠意のこもつたものは何もなく、たびたび私の心は傷けられた。」

第三は、ゲーテがロッテに宛てた書簡で、劇場の指定席及び劇場迄の馬車を使つて欲しいという、十月九日付け招待状である。この書簡は再會後のゲーテの氣持をあらわしたものととして、さきの簡單な日記と考え合せて、いろいろと推測の餘地を拓いている。

ゲーテとロッテの再會にはこの様な外的資料が残されており、「ヴァイマルのロッテ」はこれらの事實を素材として成立している。

× × ×

作品の梗概を述べると、一八一六年九月も下旬の夏めいた或る朝、ヴァイマルのさる有名な旅館の前に、一臺の驛遞馬車が止り、シャルロッテが娘と女中同伴で現われる場面が始まる。小肥りの彼女はなお若い昔を偲ばせて、娘よりも一層魅力があつた。宿帳に「宮中顧問官夫人、シャルロッテ・ケストナー、舊姓ブッフ」と書かれたのを見て、番頭は目の色を變え、「ヴェルテルのあのロッテで」と念を押して忽ち噂を擴めてしまい、先ず、有名なスケッチするのを樂しみに旅行している英國娘カズル (Rose Cuzle) が、しばらくおしやべりをして休もうとしているロッテを引止める。彼女が引下つた後、この作品の過半を占めるゲーテに關する話が、次々と登場する人とロッテの間で行われてゆく。第一には、ゲーテの學僕、ゲイルヘルム・リイメル博士 (Dr. Friedrich Wilhelm Riemel) が登場し、ロッテのヴァイマル來訪を聞いて急ぎかけつけてきたのも、詩聖の偉大さを話したいからだ、多年奉仕した蘊蓄を傾ける。次に有名な哲學者シヨオベンハウエルの妹アデレ (Adele Schopenhauer) が訪れ、ゲーテのことと共に、彼女の親友オットイイリエ・ポオグエイシュと、詩人の息子アウグスト (August Goethe 1789-1830) との關係を、悲しい豫感に満ちた氣持で物語る。最後にアウグストが登場し、詩聖の昨今の動靜を傳えて、二十五日の晝食會に招待する。場面はゲーテの寢室に移り、朝の目覺めと共に想に耽る詩聖が現われて、晩年の成熟した豊かな思想をつぶさに語り、來るべきロッテとの再會に臨む氣持を暗示する。二十五日には近親者等十六人が集まつた。ヴェルテル時代の服装をして、女學生の様に胸をときめかしたロッテは、若いゲーテの心呼び起さんとしたが、既に豫想された如く、ゲーテは儀禮的で冷淡な態度をとり、意識的にロッテを避けていた。ロッテはゲーテと會う目的、即ち「勘定を清算すること」を果さぬままに、解けない悩みを抱いて別れて行つた。

それからなおしばらくヴァイマルに滞在しているロッテの許に、ゲーテから劇場への招待狀が來て、十月九日ゲーテ差廻しの馬車で彼女は一人出掛けた。歸途、來ない苦のゲーテが馬車に待つていて圖らずも二人は心の中を述べあい、互に諒解して別れた。ロッテがゲーテの馬車から降りる所でこの小説に幕が下ろされる。

具體的事實を基にしたこの作品にも史實と相違する點が若干あり、マンの創作意圖との關連に於て興味深いものがある。

それは、當時リイメル博士がアウグストとの不和でゲーテ家に出入してないこと、アデレ・シヨオベンハウエルも一八一六年秋

には、ライン地方に滞在しヴァイマルに居なかつたこと、ゲーテの話の中でボヘミヤへの旅が出て来るが、これは一八二三年のことで六年早いこと、ゲーテ家の晝食會には十六人の參會者があつたとしているが、事實は、唯ゲーテ、アウグスト、ロッテとその娘、妹アマリア・リイデル夫妻の六人きりであつたこと、最後の馬車で一緒になることは記録にないこと、更に官房長ミユラー氏宅でもう一度二人は會ひ、又劇場でもしばしば會つて、ロッテの娘の報告では、このことがあつてから二人の關係は大分温められたとあること、等である。然しいずれも素材の眞實性を基本的に搖がす程のことではなく、むしろ作品の構成に、即ち稀有の再會という特徴を一點に凝結して表現しようという構成に、必要なことであつたと言ふことが出来る。

× × ×

世に「ヴェルテル時代」と言われる程、人生に於ける一時期を典型として生きたゲーテの、シャルロッテとの戀愛體驗は、彼の生涯に於て一回限りの完結した事件に過ぎないのであるか。一個の人間の生死を搖り動かす程の體驗が、人間の成長にとつても輕視し得ない事實であることは、幾多の先人の事例で明らかであつて、ゲーテの場合にも、他の女性を暫く措くとしても、ロッテとの交渉がどんな形で後のゲーテに作用したのか、又あの偉大さを備えた大ゲーテとヴェルテル時代のゲーテとを結ぶものは何かということに關心を持つのは、ゲーテに心を寄せる者にとつては當然のことであろう。マンもその一人であつたことは言を俟たない。ゲーテをヨーロッパの文化、道德の最高の代表者とし、ドイツ的存在の最高と信じるマンは、晩年のヴァイマル時代のゲーテに、立派な作品の詩人としてよりも以上に、「人生の王者」(ein Fürst des Lebens)を發見し、威嚴ある服装の下に偉大さの祕密がひそむことを、既に評論「ゲーテとトルストイ」の中で明らかにしている。一八一六年の逸話に依つて何を表現せんとしたかに就いては、この時代のゲーテにその眞髓を把えたマンが、この「ヴァイマルのロッテ」の後二年してコローナ(Corona)誌に發表した(發表は二年後だが、執筆は「ヴァイマルのロッテ」が書き始められた一九三八年であると記録されている)「ゲーテのヴェルテル」という評論の最後にあらわれている。

「私はこのアネクトオテから深い意味を持った物語 (Erzählung) が、いやそれのみか長篇小説 (Roman) さえ出来上り、感情と文學に關し、老年の威嚴と衰亡に關し多くのことがそこで論ぜられ、更に、それがゲーテの、いや凡そ天才というものの迫眞的な像を描きつけかけとなると思う。」

ロッテの期待を裏切つた史實は、マンのゲーテに對する認識をより強め、晩年のゲーテの本質を託するに足る素材であつたということが出来よう。

ではマンの扱えたゲーテ像は如何なるものであつたらうか。

この作品の長い對話の後にやつと登場するゲーテは、

„……, daß ein großer Dichter vor allem groß ist und dann erst ein Dichter.“ (Lotte in Weimar S.282) (偉大な詩人は、先ず偉大であつて、然る後に詩人である。)

というマンの根本認識に裏付けられている。既にゲーテは「老年の力と持續の重みと精神とのもとで初めて生ずる偉大さ」を保持し、『ヴェルテル』を青年の愛の姿とみて「雀のお祭り」(Spatzfest)と呼んで、「老年に於ける青春」を讚美している。それは青年には理解し得ぬもので、老年のみが知り得る恵みである。それには精神が要り、生を更新する才能を必要とするからであつて、その才能は謂わば老年の特權である。動物は束の間に生きる。それは外的時間が如何に長くとも、「傳記」となり得る内的時間が束の間に等しいからである。これに反し、人間が自己の状態の繰返しを知っているのは、精神を強化して、過去の生活をもう一度生きる才能が人間にあることを示している。高度の若返りこそ人間のものである。ゲーテはこの様に信じていた。そしてこの頃のゲーテは、昔のロッテに代るマリアンネを配置し、アルベルトに相當する男、ヴィレメルも彼女の背後に居る。「マリアンネの場合は既に慣例の祭典であり、儀式であり、最初に制定されたものの模倣であり、嚴かな執行というものであり、時間を超越した記念の遊びであつた——最初のロッテの場合よりは生に乏しいが、又、より多くの生を持つもの、即ち精神化された生なのであつた。」丁度それは、『西東詩集』と『ヴェルテル』との關係にあてはまる。兩者は兄弟であり、更にはつきり言つと、「段階を越えた同一のもの、高めたもの、醇化され

た生の繰返し」なのである。そして『ヴェルテル』讚美者たるナポレオンからも指摘された「上流社會への反抗、貴族に對する憎しみ、侮辱された平民の恨み」が作品を濁らせているのにひきかえ、『西東詩集』はそれらを棄てて、成熟した偉大な姿を示している。それにもかかわらず、『ヴェルテル』の生々しさはもう二度と見られないのであつた。それは諦めなければならないものであり、完全な復元ではないが、更新されなければならない宿命を持つていた。その様な更新は、「いとも朗らかな繰返しの祭り」であつて、偉大さを生み、それを支えるものであつた。ゲーテにとつて、辛うじて出來た「天才的行爲」は輕視すべきものであり、憎むべきものであらあつた。それというのも、ゲーテ自身先祖から何代か繰返されたものを綜合した姿であると、己を把えているからである。かくて

「眞の存在とは、自分自身のなかで、自分自身に於て活動し作用する結果、生成と存在、作用と作品、過去と現在とが同一のものとなり、そこに現われる持續が、持續であると同時に不斷の増加であり、向上であり、完成であるという様な存在でなければならぬ。」

のであつた。

ここにあらわれた「繰返し (Wiederholung)」の思想は、「永遠の若返り」(ewige Verjüngung)「持續的變化」(Dauer im Wandel)「メタモルフォーゼ」(Metamorphose)と共に、「ゲーテの有名な „Stüb und Werde!“ の思想によつて導かれたものであり、この作品の重要なライトモチーフとなつてゐる。

この「繰返し」のモチーフは作品構成にも形を採つてあらわれ、さきに擧げた通りゲーテ、ロッテ、アルベルトは、ゲーテ、マリアンネ、ヴィレメルの姿を採り、『ヴェルテル』と『西東詩集』との關係となつて、現在と過去の配置が相關的に、音楽的に組合わされてゐる。付け加えるならば、ロッテの娘クララは作中では「ロットヒェン」と呼ばれ、ロッテの市民的性質の一面を持つて現われるのは、アウグストが父ゲーテの一面を持つて登場すると同様で、ここには一つの意味が織込まれてゐる。つまりこの様な配置は、マンが愛用する『對立によるコントラスト』を著しく強めることとなつて、ロッテ、アウグスト、及び、ゲーテの本當の價値に觸れない人の置かれてゐる位置と、ゲーテの持つ偉大さを際立たせる要素となつてゐるのである。

それではこの「繰返し」によつて得たゲーテの偉大さはどんなものであつたらうか。リイメル博士とロッテの對話がこの問題に就いて論じている。ロッテの口を通して、「偉大な人を唯偉大な、偉大だというのは笑うべきことだ」と、陥り易い誤謬が指摘されている。ロマーンの冒頭に登場する旅館の番頭マーゲルも、有名人のスケッチ旅行をするミス・カズルも共に、ゲーテの偉大さに觸れるのである。唯有名であることにのみ意義を感じている人物の、典型として描かれているのは、このロッテの言葉を裏付けるために配置されたものであつて、ゲーテを取巻く人、偉大な人を讃美する人々の一部にこびりついている氣質を、マンが粗上へのせたものである。加うるにこれは、斯くの如き一部の人々の立場を、即ち有名であることと、ゲーテの眞の偉大さとの間には深淵が横たわつてゐることを示し、作品は又この深淵に就いてもその實體を明らかにしている。

ゲーテの偉大さに戻ると、聖書の創世記（四九章、二五節）に出て来る「上なる天の福、下に横たわる淵の福によつて」祝福されることは、即ち精神と自然の二重の祝福であつて、それは「一人の人間の中で最も力強い天賦の才能と、最も驚くべき素朴さとが結合する」ことであり、これは人類を最も魅惑する存在となる。彼は二つの世界に足を入れて立ち、そのため姿勢は幾分苦しいものとなつてゐる。然し人間の精神というものは何等かの方法で創造精神と結びついて居り、しかも自然の兄弟であるから、「創造」というモメントの中では、精神と自然は一體となり得るのである。そして彼は神と悪魔とを對立する原理と考えず、神を全體とみて、悪魔をその一面とみなしてゐるから、「一方の眼からは天國と愛とがのぞき、他方の眼からは最も冷やかな否定と、最も破壊的な局外中立性とを備えた地獄がのぞく。」この左右矛盾の眼差しが一つの眼差しとなるのは「藝術の眼差し」(Blick der Kunst)であつて、それは「絶對的な愛であると同時に、絶對的な破壊若しくは無關心」である。この眼差しによつて「神的『悪魔的なもの』」(das Göttlich-Teufelische)へと接近することこそ、「偉大さ」なのである。

この「偉大さ」を備えた人間は、「あの祝福の呪い、あの憂えを抱かせる人間の二重の境遇が、彼に於て極端化されると同時に、止揚された姿を採る限りに於て、實際偉大であると同じ程度に人間である」様な二極性の上に立つ存在で、しかもこの場合に於ける止揚の意味は、「上なる天の福と、下に横たわる淵の福」という祝福の組合せが、呪いめいたものを少しも加味しないで、謙虚でないとは言

われないが、然し卑下しない、絶対に高貴な調和と地上的幸福の公式になる」ことであつて、このことはその「偉大さ」の本質を規定して究極の姿をのぞかせている。

かくてその「偉大さ」の眞髓は、天才的なこと、悲劇的なことから、偉大であつてしかも人間たり得る藝術の眼差し、宥和的なものへと昇華する場に於て把えられているのである。これはマンの研究で知られているブルーメ (Bernhard Blume) の「悲劇的なものから宥和的なものへ」(vom Tragischen ins Versöhnliche) ということによく盡されている。又このことは、マンの本質をなす「市民性と藝術性」の究極的な姿として理解されるべきものと思う。

ここに「人生の王者」の偉大さは隠れる所なくあらわれている。加えてゲーテ家の一員たるマンが、ゲーテへの道をたどる姿が如實に展開され、パロディ (Parodie)、イロニー (Ironie)、ニヒリズム (Nihilismus) の問題が、ゲーテの偉大さとの関連に於て論じられている。このことはゲーテとマンの深いつながりを理解するのに極めて重要な部分であつて、評論の全てを揃えても盡し得ぬ強いきずなを感じさせる。又、リイメル博士は言語部門に於けるマンの博識を伝え、言語學者リイメルの姿を浮出させているが、ブルーメは、彼の日記を讀んでみると、作品にあらわれた様な適切な表現力、鋭い觀察能力を持たないと指摘し、更にアウグストも作中に於ける様なはつきりした性格の人間でないことをも擧げている。然しこれはいずれも、マンが創作意圖に従つて肉付けしたもので、この點でむしろ前に擧げた史實との相違と共に、この作品に於けるマンの自己表現の程度を知ることが出来る。

このリイメルとロッテとの對話では、ロッテが「目的への手段」として、若きゲーテの詩的形成に素材の役を果したことを訴え、ヴァイマルに來たのも「清算されない惱ましき勘定」を整理するためであると告白する。これを見てもヴェルテルの惱みは、實はロッテの惱みであつたといつてもよいのである。アルベルトとの交渉で一人前の女性に成長した花嫁の核心を奪い去る若いゲーテを評して、「寄生蟲根性」とロッテの口から言わせるのは、偉大な人間の周囲がさながら戦場の様に血腥い犠牲を要求していることを示している。「犠牲」(Opfer) もライトモティーフの一つである。詩人ゲーテの心に生命を吹込んだロッテも、「大詩人の息子」という宿命を持ったアウグストも、息子アウグストとの關係に於て父ゲーテをみ、又逆に息子を通して一個の女性とみられているオットイリエも、

——この意味でアウグストとオットイイリエは、ゲーテとロッテの繰返しである——更に巨匠の偉大さの影に生きるリイメル博士も、皆犠牲であつた。「ヴァイマルのロッテ」はこの點で偉大さの要求する犠牲を描いているといつてもよい譯である。更にアデエレの語るアウグストとオットイイリエの不幸な關係は、「犠牲」と「偉大さ」と「繰返し」の三重奏となり、獨自のハーモニーを響かせながら、偉大な人間の祕密を如實にあらわしている。

然しこの犠牲はゲーテの偉大さにとつては小さなものでしかないのである。馬車の中で初めて二人きりで會つた時、ロッテは犠牲になつた女性を代表して、「蚊を誘惑して殺す焰」という譬喩でゲーテに激しく迫つた。ゲーテはそれに對し、「私は燃えるローソクにもなつて、自分の身體を犠牲にして燃やしつゝ、明るい光を輝かせる」のだし、又「焰の中に落ちこむ酔いしれた蝶にもなる」のであつて、「私こそ最初から最後まで犠牲である」と答え、過去が現在に於て變化し、現在が未來をはらむという、この統一の姿に、犠牲も意義を持つ様になり、それが犠牲以上のものとなつて、「死さえも變化に過ぎない」様な「萬象一如」の世界に於て、共々に喜んで再び目覺める日を明示しているのは、ゲーテの眞實の姿を傳えるものといえよう。

この最後の馬車の場面には、この作品のライトモチーフたる「偉大さ」「犠牲」「繰返し」「若返り」「持續的變化」「統一」「メタモルフオーゼ」の問題がもう一度繰返され、一場に集められている。このことにマンの深い配慮を感じぬ者はないであろう。またエピソードに旅館の番頭が「ヴェルテルのロッテを、ゲーテの馬車から下すのを助けることは記録すべき價值がある」といつているのは、作品の冒頭に於ける彼の態度と共に、ゲーテの偉大さを描いているこの作品を、マンらしい皮肉で包んで際立たせている。マンにとつてはこの逸話の奥に擴がっている世界、即ちゲーテの眞の偉大さこそ記録すべき價值を持つていたのであつた。この對比は、眞面目なことを諧謔に託し、重大なことを軽く言うマンの特徴のあらわれであつて、この作品もかかる特徴の上に、偉大なドイツ人の詩的ポートレートを扱えたということが出来る。ここにもマンの深い配慮を感じない譯にはいかない。

更に犠牲者と犠牲を必要とする者との一致即ち「悲劇的なものから宥和的なものへ」という鎖が、作品に流れる全ての對立を有機的に結びつけ、ゲーテ的調和の世界へと融合させるこの象徴は、全ライトモチーフの繰返しの一環として、まことにこの作品に適わし

き結末と言わなければならぬ。

× × ×

この作品はマンが一九三八年アメリカのニュー・ジャーシーに移住して、翌年發表されたもので、大作「ヨーゼフとその兄弟たち」(Joseph und seine Brüder—1933~1943)の第三部「エジプトのヨーゼフ」(Joseph in Ägypten—1936)と第四部「養う人ヨーゼフ」(Joseph der Ernährer—1943)の間に書かれた。この間のマンの活躍を想い起せば、「ヴァイマルのロツテ」を取巻く時代は、マンの最も戦鬪的な時代であることが知れよう。これは作品の成立に見逃すことの出来ない力となつて働いている。

一九三三年ナチス・ドイツを去つたマンが、以後あらゆる機會を把えてドイツに警告していたことは、改めてここに述べる必要もない。この作品もその様な流れの例外ではなかつた。マンは「いまましいこの民族から出て——この民族に逆つて——生き、この民族を教化するという天職を與えられた」ドイツ人として、當時の迷つたドイツ人を鋭く批判している。ゲーテの口のみならず、アウグストの口からも、ライメル、ロツテの口からも、直接間接に語られる中で、狂暴なナチスのパーバリズムと偏狭な國家意識に酔いしれたドイツ人に訴える言葉は、その集約的表現ともいふべきもので、ゲーテにあらわれた自由なドイツ精神への強い確信に貫かれて居り、しかもその上に立つて最終的和解を求めている。

「彼等(ドイツ人)が明晰を憎むのは正しくない。彼等が眞理の魅力を知らないのは嘆かわしい。——彼等が幻影や醜陋や、熊の皮を着て戦う狂暴な勇士さながらの度外れを全て有難がるのは、厭わしい。——有頂天になつてはめを外したならず者が現われて、彼等の最も下劣な性質を呼び起し、彼等の惡徳を支持して、國民性とは野蠻な孤立のことだと思えと教える度に、彼等はそういうならず者のいうことを信じて歸依する、……」

これはヒトラー時代の本質を鋭く衝き、的確にえぐり出して、破局を大戦寸前に豫言しているもので、明日の世界を指向する人類の歩みを、マンが正しく把えている證據となるものである。それはまたマンが、整然とはしているが、書庫の奥深くに納われている書物

の作家ではなく、現在、直接我々の思考の糧となる書物の作家であることにも通じている。

「私は自分のドイツ精神を捨ててはしない。彼等の方こそ、彼等のいわゆる意地の悪い俗物根性もろともくたばつてしまふがよい。彼等は自分たちがドイツだと思つている、ところが私こそドイツなのだ、そしてドイツは根こそぎ亡び去るとしても、私の中で續いてゆくだろう。」

この比肩するもののない搖ぎなき確信こそ、マンの生涯に輝やかしき光彩を添えるものである。

「ドイツ精神とは自由であり、敦養であり、全面性であり、愛である。」

「なんの喧嘩口論はし合つているが、それを高く超越して、軽やかな意味深いたわむれのなかに、私は瀟灑的な和解を祝うつもりなのだ。」

ここに至つて「ドイツ精神」を生きるマンの未來そのものを眺望することも出来る。要するにここには、トーマス・マンの名がこの世から忘れられぬ限り、常に引用される素晴らしい言葉の結晶が練り展げられているのである。

これはゲーテの口を通して、ナポレオンへの獨立戦争に狂奔し、勝利に酔うドイツ人に語る形式になつてはいるが、ゲーテ時代に於けるドイツ人の姿は、それ以來歴史に現われた如く度々繰返されて、ナチスの時代もその一部に過ぎないのであつた。このドイツ人の姿はマン自身に激しく襲いかかり、マンの存在と激しく對立するに至つた。そこでドイツ人の等しく、無條件に敬愛するゲーテの眞實の姿を描き、ゲーテを通してドイツ人に眞のドイツ精神を訴えるという意圖が、この作品の成立に一つの要素となつたと推測するのは無謀ではないと考えられる。このことからしても、「ヴァイマルのロツテ」は外的素因と、内的素因とが結集して、一點に集められた成果であると言ひ得る。

最後にこの作品とマンとの關連に就いて考えてみよう。晩年のマンに見られる「時」に關する考察は、この作品にも「時の恩寵」として既にその一部をのぞかせている。「時間はひそかに面倒をみてくれて、^{アモレニシテ}魔神的な仲裁をしてくれる」とゲーテの口を通して述べているのは、興味深いことである。「時の恩寵」はこの作品のライトモチーフと深い關係を持つつ、さきに觸れた「外的時間」と「内

的時間」を包括して、マンの生涯を通じたライトモチーフへと成長してゆく。一九五〇年「私の時代」(Meine Zeit)と題して行われた講演で、意識的に自分の生涯に就いて語るのを避け、彼の周囲に渦巻く時の流れを語っているのも、また一九五四年一月日本の「新聞に寄稿した」流轉賞讃」(Lob der Vergänglichkeith) という小品——自ら哲學的斷片と名付けている——に於て論じられている「時の恵み」も、いずれもここに擧げた點で「ヴァイマルのロッチ」と深いつながりを持つてゐることは明らかである。このことは、それ迄にエッセイで扱えたゲーテを、ロマンに於て総合的に形成したこの作品が、以後の作品の方向にどんな意味を持つかということを示している。作品の上のマンとゲーテのパラレルな關係は、また詩人として、人間としての關係にも言えることと思う。この意味からも、マンのゲーテへの理解に止まらず、ゲーテへの道をマン自らが語つてゐる記念すべき作品である。

テキスト

Thomas Mann: „Lotte in Weimar“ (Bernann-Fischer, Wien)

参考文献

B・ブナーメ「トーマス・マンとゲーテ」Bernhard Blume: „Thomas Mann und Goethe“ (A. Franke, Bern)

H・アイヒナー「トーマス・マン」Hans Eichner: „Thomas Mann“ (Sammlung Dalp, Franke, Bern)

H・マイヤー「トーマス・マン—作品を展開」Hans Mayer: „Thomas Mann—Werk und Entwicklung“ (Verlag Volk und Welt, Berlin)

P・フヒーター「ドイツ文學史」Paul Fechter: „Geschichte der Deutschen Literatur“ (C. Bertelsmann)

佐藤晃一譯「戀人ロッチ」上・下新潮社版

茅野蕭々著「ゲョエテ研究」第一書房版

(「ヴァイマルのロッチ」からの引用は、主として佐藤晃一氏の譯文による。)